

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

『緋文字』の語り手：
ピューリタンの価値観に基づく語り

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏原, 和子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006340

『緋文字』の語り手：ピューリタンの価値観に基づく語り

柏原和子

I

ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)の『緋文字』(*The Scarlet Letter*)の語り手については、従来から多くの批評家が様々な論を展開してきた。ノーマン・ブライソン(Norman Bryson)は“Hawthorne's Illegible Letter”の中で、『緋文字』のわかりにくい語りを論じて、これは安定した登場人物の造形を拒否したり、テキストにおけるクライマックスやテーマの中心を否定するなど、ホーソーンの計算された不確実性からくるものだと述べている。また語りのわかりにくさは、外見描写が内面を表さないなど、フィクションにおけるあらゆる約束事をホーソーンが無視していることにも原因があり、ホーソーンの語りは作者と読者が共感を抱けるようなものではない、両者が共有できる世界などない、と主張する。そしてホーソーン作品の中では、語りは作者が風に木の葉を投げるようなもので、一旦、作品が回り始めると作者はコントロールを失うような語りだ、とまで言う。¹⁾

デイヴィッド・レヴァレンツ(David Leverenz)は、『緋文字』の語りには一つの対象に対して、受け入れたかと思うと拒絶するような二律背反が見られると言う。一つの例として監獄の前の野バラの茂みの描写を挙げ、語り手は一旦、希望の扉を開けた後すぐ、「人間の弱さと悲しみの物語の暗い結末」という表現で扉を閉めてしまう、と述べる。この語り手は、特にヘスター(Hester)の家父長的な社会に対する反逆や、自由な生き方を肯定したかと思うと否定するように、アンビヴァレントな語りを続ける、とレヴァレンツは指摘する。²⁾

また語り手を論じたものではないが、藤川玄人は『緋文字』には束縛的で抑圧的な非ロマンティズムと、ヘスターの「無法な」ロマンティズムという二つの価値観が投影されており、両者は絶えず対立し、いずれの方にも最終的な勝利を収めさせずに物語は終わる、と『緋文字』の曖昧さに言及している。³⁾

しかし本当にこの『緋文字』は、どのような価値観に依拠するのか分からない、不確実で曖昧な物語なのであろうか。本論の目的は、一見、わかりにくく曖昧な語りをするように見える

『緋文字』の語り手が、実は明確な姿勢を堅持し、終始一貫して一つの立場に立った語りをしていることを論証することである。

II

ブライソンはフィクションの約束事をホーソンが無視していると言うが、ある意味でそれは当然である。ホーソンは自分の長編をリアリスティックなノヴェルではなく、ロマンスであると定義している。『七破風の館』(*The House of the Seven Gables*)の序文にある「ロマンス論」と並んで有名な、『緋文字』の序章「税関」(“The Custom-House”)の「ロマンス論」によると、ロマンスを書くことは次のように説明される。

Moonlight . . . is a medium the most suitable for a romance-writer to get acquainted with his illusive guests. . . . All [the] details, so completely seen, are so spiritualized by the unusual light, that they seem to lose their actual substance, and become things of intellect. . . . Whatever, in a word, has been used or played with, during the day, is now invested with a quality of strangeness and remoteness Thus, therefore, the floor of our familiar room has become a neutral territory, somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other. . . . Glancing at the looking-glass, we behold—deep within its haunted verge—the smouldering glow of the half-extinguished anthracite, the white moonbeams on the floor, and a repetition of all the gleam and shadow of the picture, with one remove farther from the actual, and nearer to the imaginative. Then, at such an hour, and with this scene before him, if a man, sitting all alone, cannot dream strange things, and make them look like truth, he need never try to write romances.⁴⁾

このようにロマンスは現実的なものと想像的なものが混ざり合う領域——中立地帯で起こることを描くものであり、ロマンス作家は不思議なことを夢み、それを真実らしく見えるように書く。したがってノヴェルの約束事が通用しないのは当然であり、ロマンスにおいては作家の想像力によって、夢のような不思議なことを事実として呈示することもできるのである。

現実的なものと想像的なものが混ざり合う領域で起こることを描くのがロマンスであると定義されているが、『緋文字』はかなり現実的要素の濃い作品である。ヘスターの生き方、ディムズデール(Dimmesdale)の苦悩、チリングワース(Chillingworth)の復讐が夢物語というよりむしろ現実の物語のように語られる。『緋文字』をリアリスティックにしている要素の一つは、この作品が歴史的事実をふまえていることであろう。17世紀のマサチューセッツ植民地を舞台に、ベリンガム総督(Richard Bellingham)、ウィルソン牧師(John Wilson)など、実在の人物を登場させ、前総督ジョン・ウィンスロップ(John Winthrop)の亡くなった日をプロットの中で効果的に利用している。また初期ピューリタン社会の風俗や慣習、思想を描くとともに、そ

れとは相容れない自由主義思想などもとりいれるなど、当時の思想的背景をもふまえている。しかしながら『緋文字』をリアリスティックにする最大の要素は序章「税関」の存在であろう。「税関」が、作品が書かれた19世紀から作品の舞台である17世紀へ、そして現実の世界から想像の世界へのトンネルの役割を果たしているとはよく言われることであるが、⁵⁾ この序章では作者ホーソン自らの税関勤務の体験談や実在の祖先の残虐行為が言及され、また大統領選挙で反対党の候補が選出されたために税関での職を失った経緯まで、事細かに描かれている。読者はホーソンの自伝エッセイを読んでいるように感じさせられた終盤になって、突如、検査官ピュー氏(Jonathan Pue)のヘスター・プリンの物語と緋文字の布が登場する。税関の二階でのこの発見はもちろんホーソンのフィクションであるが、語り手はこの発見を『緋文字』の物語の材料として使ったことについて次のように説明する。

And it should be borne carefully in mind, that the main facts of that story are authorized and authenticated by the document of Mr. Surveyor Pue. The original papers, together with the scarlet letter itself,—a most curious relic,—are still in my possession, and shall be freely exhibited to whomsoever, induced by the great interest of the narrative, may desire a sight of them. I must not be understood as affirming, that, in the dressing up of the tale, and imagining the motives and modes of passion that influenced the characters who figure in it, I have invariably confined myself within the limits of the old Surveyor's half a dozen sheets of foolscap. On the contrary, I have allowed myself, as to such points, nearly or altogether as much license as if the facts had been entirely of my own invention. What I contend for is the authenticity of the outline. (26)

すなわち語り手は「あたかも自分自身で発明したかのように自由に」物語を書いたが、あくまでも大枠は検査官ピュー氏の文書によるものであり、「この物語の主要な事実はピュー氏の文書によって、その信憑性を保証されている」と述べている。デイヴィッド・ストーク(David Stouck)が論証しているように、この「税関」の語り手と『緋文字』の物語本体の語り手は同一人物であることを考慮すると、『緋文字』の物語はその序章で、「事実に基づく物語」としての枠組みを与えられているのである。⁶⁾

さらに語り手自身の語り方にも『緋文字』をリアリスティックに見せる要素が含まれている。『緋文字』の語りは、対象の客観的描写とそれに対する語り手の分析と評価から成るが、大部分を占めるのは客観的描写である。これは語り手自身の視点から語られることもあれば、登場人物の視点を借りて語られることもあるが、いずれにせよ、この部分は語り手自身の評価を排除した、きわめて客観的な描写になっている。たとえば第14章で久しぶりに会ったチリングワースの変わり様にヘスターが驚く様子を語り手は次のように描写する。

All this while, Hester had been looking steadily at the old man, and was shocked, as well as wonder-smitten, to discern what a change had been wrought upon him within the past seven years. It was not so much that he had grown older; for though the traces of advancing life were visible, he bore his age well, and seemed to retain a wiry vigor and alertness. But the former aspect of an intellectual and studious man, calm and quiet, which was what she best remembered in him, had altogether vanished, and been succeeded by an eager, searching, almost fierce, yet carefully guarded look. It seemed to be his wish and purpose to mask this expression with a smile; but the latter played him false, and flickered over his visage so derisively, that the spectator could see his blackness all the better for it. (115-16)

このようにチリングワースを描写した後、語り手は次のようなコメントを付け加える。

In a word, old Roger Chillingworth was a striking evidence of man's faculty of transforming himself into a devil, if he will only, for a reasonable space of time, undertake a devil's office. This unhappy person had effected such a transformation by devoting himself, for seven years, to the constant analysis of a heart full of torture, and deriving his enjoyment thence, and adding fuel to those fiery tortures which he analyzed and gloated over. (116)

チリングワースが悪魔に変身した、というのは語り手の評価であるが、この極言とも思える語り手のコメントも、それに先立つヘスターの視点からの客観的な描写のおかげで、それほど奇異に映ることはない。このように客観的描写を語りの基本に置くことが、語り手に客観的で信頼できるというイメージを与え、語りの信憑性と物語の現実味を高める要素となっている。

III

ブライソンやレヴァレンツが語り手をアンビヴァレントであり、あるいは不確実であるとする最大の理由は、ヘスターの反ピューリタンの、自由主義的生き方が森の場面などでは肯定的に描かれているように思われるのに、最後にはそれを否定する結末を持ってきたり、ヘスターの自己犠牲の生き方を描いたかと思うと、針仕事でなだめなければならないような禁じられた情熱を持ちつづけていることを指摘するなど、ヘスターに対して語り手が示す曖昧な態度にあると思われる。しかし本当に語り手はヘスターを曖昧に、アンビヴァレントに描いているのだろうか。

上に述べたようにこの語り手の語りには、対象の客観的描写、語り手によるその分析、そして最後に語り手の評価という区分がある。今ひとつの例を挙げると、緋文字を胸に着けたヘスターのピューリタン社会での生活ぶりを語り手は次のように描写する。

Hester sought not to acquire any thing beyond a subsistence, of the plainest and most ascetic description, for herself, and a simple abundance for her child. . . . Except for that small expenditure

in the decoration of her infant, Hester bestowed all her superfluous means in charity, on wretches less miserable than herself, and who not unfrequently insulted the hand that fed them. Much of the time, which she might readily have applied to the better efforts of her art, she employed in making coarse garments for the poor. (58-59)

次にこれを分析して次のように述べる。

It is probable that there was an idea of penance in this mode of occupation, and that she offered up a real sacrifice of enjoyment, in devoting so many hours to such rude handiwork. She had in her nature a rich, voluptuous, Oriental characteristic,—a taste for the gorgeously beautiful, which, save in the exquisite productions of her needle, found nothing else, in all the possibilities of her life, to exercise itself upon. Women derive a pleasure, incomprehensible to the other sex, from the delicate toil of the needle. To Hester Prynne it might have been a mode of expressing, and therefore soothing, the passion of her life. Like all other joys, she rejected it as sin. (59)

最後にこのようなヘスターに対して語り手は、“This morbid meddling of conscience with an immaterial matter betokened, it is to be feared, no genuine and steadfast penitence, but something doubtful, something that might be deeply wrong, beneath.”(59)という評価を下す。このうち、語り手の態度を見るのに最も重要なのは、最後の語り手による評価の部分である。緋文字を胸に着け、ピューリタン社会で自己犠牲と慈善に生きるヘスターの生活を語り手は「罪の償いの苦行という思いが込められていたのかも知れない」と分析するが、「心底からの悔悟の念を示すのではなく、その背後に、何らかの迷い、何らかの根深い錯誤があることを示しているのではないかと思われる」と評価する。このように語り手がヘスターの苦行のような慈善の生活を描いたからといって、彼がそれを肯定しているとは言えないのである。語り手が対象をどのように評価するかをたどることによって、語り手の態度、姿勢が自ずから見えてくる。

ではヘスターに対して語り手が何らかの評価を表す部分をたどっていくことにする。上の引用は第5章で禁固の刑が終わったヘスターが、共同体の中で生活し始めた直後の様子を描いた部分であるが、第13章で語り手は、7年後ヘスターの見方がどのように変化したかを描いている。世間と争わず、ひどい仕打ちにも甘んじて耐え、貧しい者には進んで持ち物を分け与え、疫病が流行したときには献身的に奉仕し、清廉潔白な生き方を続けるヘスターに、多くの人は敬愛の念を抱くようになり、彼女の罪をあらかた許し、緋文字を罪のしるしではなく、善行のしるしと見なし始めた。ヘスター自身にも変化が見られ、女性的な暖かみが消え大理石のように冷たい印象を与えるようになったが、語り手はその理由を「彼女の人生が情熱と感情の人生から思考の人生へと変化したこと」に求められるとする。ヘスターは「旧来の原理と不可分に結びついている古い偏見を根底にすえた全体系を破壊し、再構築する」ような精神を吸収して

おり、思想の自由を信奉していたが、このような自由は、当時のピューリタンたちからは「緋文字によって烙印を捺された罪よりもなお恐るべき罪悪である」と見なされたと語り手は指摘する。⁷⁾そしてそのような生活を送るヘスターについて語り手は次のようなコメントを与えている。

It is remarkable, that persons who speculate the most boldly often conform with the most perfect quietude to the external regulations of society. The thought suffices them, without investing itself in the flesh and blood of action. So it seemed to be with Hester. (113)

すなわちヘスターが社会の法にしたがって苦行と慈善の人生をおくっているのは実はうわべだけの姿で、内面では当時の社会では恐るべき罪悪と見なされる、きわめて大胆な思索にふけているのだ、と語り手は言うのである。そしてこの後、ヘスターの思索が問題解決につながることはなく、彼女は暗い精神の迷路をさまよひ、心の平静を失い、ときには、恐ろしい疑惑にとらわれて、「パールをさっさと天国に送り出して、自分自身は裁きの神が定めるがままに、どんな来世にでも行ってしまおうほうがましではないか、と思うことがあった」とヘスターの心中を描写した後、語り手は“The scarlet letter had not done its office.”（「緋文字はその役割を果たしていなかった。」）（114）という評価を下す。ここで緋文字の役割とは、罪人に恥のしるしを身につけさせることで罪を絶えず認識させ、悔い改めの一助となすことであろう。ピューリタンたちの考える罪とは、神と人の魂とを分かち、神との結合、神との交わりを断つ働きであり、罪が存在し、罪のうちにありながら悔い改めようとしなないかぎり、罪は、善を受け入れる資格をひとから剥奪するし、また、神が霊の賜を与えんと働きかけることをも不可能とする。⁸⁾ヘスターは数々の善行を積み、社会から疎外された苦行の毎日をおくることで、社会の秩序を乱したことに対する償いは行ったが、自分の犯した行為を神に対しての罪であるとは認識しておらず、したがって悔い改めもしていない、これが語り手の評価なのである。⁹⁾さらに第15章では、今までに自分が犯した、最も悔いるべき罪はチリングワースとの結婚である、とヘスターが考えたことに対し、語り手は、“Had seven long years, under the torture of the scarlet letter, inflicted so much of misery, and wrought out no repentance?”（120）との疑問を投げかけ、緋文字を着けて7年経った今なお、ヘスターが自分の本当の罪を認識せず、悔悟の念も感じていないことを非難している。

次に語り手が一見、ヘスターを擁護しているように思える森の場面の語りを見てみよう。第17章でヘスターは、自分たちのした行為について、「私たちがしたことには、それなりに神聖なところがありました」と肯定し、ディムズデルを力強く励まし、悲惨な生活しかないピューリタンの共同体を出て、新しい生活を始めることを提案する。

“Thou are crushed under this seven years’ weight of misery. . . . But thou shalt leave it all behind thee! It shall not cumber thy steps, as thou treadest along the forest-path; neither shalt thou freight the ship with it, if thou prefer to cross the sea. Leave this wreck and ruin here where it hath happened! Meddle no more with it! Begin all anew! Hast thou exhausted possibility in the failure of this one trial? Not so! The future is yet full of trial and success. There is happiness to be enjoyed! There is good to be done! Exchange this false life of thine for a true one. . . .” (135)

まことに力強い激励で、希望と喜びに輝く表情を浮かべてヘスターの顔を見つめたディムズデルのみならず、われわれ読者も思わず、二人の希望に満ちた未来の図を思い描く場面である。ところが語り手は次の第18章で、上のようなせりふが出てくる元となったヘスターの自由思想とそれに基づくこれまでの7年間について次のように述べる。

She had wandered, without rule or guidance, in a moral wilderness; as vast, as intricate and shadowy, as the untamed forest, amid the gloom of which they were now holding a colloquy that was to decide their fate. Her intellect and heart had their home, as it were, in desert places, where she roamed as freely as the wild Indian in his woods. For years past she had looked from this estranged point of view at human institutions, and whatever priests or legislators had established; criticizing all with hardly more reverence than the Indian would feel for the clerical band, the judicial robe, the pillory, the gallows, the fireside, or the church. The tendency of her fate and fortunes had been to set her free. The scarlet letter was her passport into regions where other women dared not tread. Shame, Despair, Solitude! These had been her teachers,—stern and wild ones,—and they had made her strong, but taught her much amiss. (136)

ここで語り手は、自由思想に従ったヘスターの7年間の生き方がどのようなものであったかを説明している。彼女は精神の荒野を彷徨っていたようなものであり、彼女の知性と感情が自由に彷徨ったのは砂漠のような場所であり、共同体の権威に対してはインディアン並みにしか敬意を感じず、厳しい教師であった緋文字は、また彼女に多くの間違っただけでも教えたのである。続いて、ともに罪を犯したディムズデル牧師のこの7年間の、絶えず生傷を痛めつけることによって良心をかたときも眠らせることなく、自分の感情、思考のすべてを監視する年月であったことを述べた後、語り手は前章でヘスターが行った提案に関して、次のようにコメントをする。

Thus, we seem to see that, as regarded Hester Prynne, the whole seven years of outlaw and ignominy had been little other than a preparation for this very hour. But Arthur Dimmesdale! Were such a man once more to fall, what plea could be urged in extenuation of his crime? None. (136)

このようにヘスターの一見、希望と喜びに満ちた提案を、語り手は墮落であり罪であると認識

しているのである。さらに逃げる決心をしたディムズデルが感じた奇妙な歓喜を語り手は、
 “It was the exhilarating effect—upon a prisoner just escaped from the dungeon of his own heart
 —of breathing the wild, free atmosphere of an unredeemed, unchristianized, lawless region.”
 (137)と述べ、彼らの逃げる決心は、救済やキリスト教とは無縁のものであると評している。

この後ヘスターは、「過去を振り返るのはやめましょう。」と緋文字を投げ捨て、帽子を脱いで豊かな黒髪をあらわにする。すると魔法のように、彼女に女性性、若さ、美しさが戻り、それを祝福するかのように日光が射し出で、洪水のような光を暗い森に注ぎ込む。全く魅惑的な光景が繰り広げられるわけであるが、ピューリタン共同体によって強制された罪の烙印をはずし、本来の自分を取り戻したヘスターに共感と祝福を示す「自然」に対する語り手のコメントは次のようなものである。“Such was the sympathy of Nature—that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illuminated by higher truth—with the bliss of these two spirits!”(138) すなわちヘスターに共感する「自然」は「人間の法則に従属したこともなく、より高い真理に啓発されたこともない、原始的な異端」の「自然」なのである。

そしてヘスターの提案がどういう意味を持つかは、森からの帰途、ディムズデルを襲う様々な想念により表される。教会の執事に聖餐式について不敬な提案をしたくなったり、敬虔な老婦人に、人間の魂の不滅性を否定する議論を吹き込みたくなったり、ピューリタンの子供たちに邪悪な言葉を教えてやりたいという衝動に駆られる。最後に魔女という評判の老女ヒビンズに出会い、真夜中の森へ行くよう誘われ、ディムズデルは悪魔に自分を売ってしまったのかと考える。そのような牧師に対し、語り手は次のように述べる。

The wretched minister! He had made a bargain very like it! Tempted by a dream of happiness, he had yielded himself with deliberate choice, as he had never done before, to what he knew was deadly sin. And the infectious poison of that sin had been thus rapidly diffused throughout his moral system. It had stupefied all blessed impulses, and awakened into vivid life the whole brotherhood of bad ones. Scorn, bitterness, unprovoked malignity, gratuitous desire of ill, ridicule of whatever was good and holy, all awoke, to tempt, even while they frightened him. (150)

ディムズデルが選んだ道、ヘスターの提案は地獄落ちの大罪であり、その罪の伝染性の毒は彼の道徳心の全組織に浸透するほど強力なものだ、と語り手は言う。このように語り手は決してヘスターの生き方を肯定してはいない。

IV

以上のようにヘスターに対する語り手の態度は、曖昧でもアンビヴァレントでもなく、きわめて明確な、一貫性を持ったものである。語り手は、ヘスターが緋文字を着けた直後から、彼

女の自己犠牲と苦行の生活がうわべだけのものであると指摘し、7年たった後も、ヘスターは罪を罪と認識せず、悔い改めもしていないと非難し、挙げ句の果てにはディムズデルを死に値する大罪へと誘う女であると見ている。この見方の根底にあるのは、言うまでもなくピューリタンの価値観である。ヘスターの自由主義的生き方を非難する『緋文字』の語り手は、きわめてピューリタンの人物なのである。

ここで問題になるのが、語り手のピューリタン共同体やその指導者たちに対する、数々の批判的な言説である。ピューリタンの価値観に則っている語り手がなぜ、ピューリタンたちが理想を掲げて「丘の上の町」として建設したピューリタン共同体やその指導者に対して批判的な物言いをするのであろうか。特に語り手が繰り返し、批判的に語るのはピューリタン社会の持つ冷酷さである。第2章でヘスターが初めて登場する際、ピューリタンの女性たちがヘスターのことを悪し様に噂する様子を描いた後、語り手は、“[The witnesses of Hester Prynne’s disgrace] were stern enough to look upon her death, had that been the sentence, without a murmur at its severity . . .” (41)と、群衆の苛酷さを批判的に語っているし、第5章では緋文字による刑罰について、ヘスターは絶えず、またさまざまな形で数限りない苦痛の戦慄を味わったがそれについて、“that had been so cunningly contrived for her by the undying, the ever-active sentence of the Puritan tribunal” (60)とのコメントを加えている。また語り手はピューリタンの子供たちをたびたび描くが、彼らの遊びは第14章や第15章で描かれているパールの無邪気な子供らしい遊びとは対照的なものである。第6章でパールがピューリタンの子供たちの遊びを見ているときの描写では、教会ごっこ、クエーカー教徒を鞭打つ迫害ごっこ、インディアンの頭の皮をはぐまね、魔女ごっこなどの子供たちの遊びを“in such a grim fashion as the Puritanic nurture would permit” (65)と評し、第7章ではヘスター母子が町へ入っていくと子供たちが遊びをやめて二人に注目する様子を、“the children of the Puritans looked up from their play,—or what passed for play with those sombre little urchins” (70-71)と、ピューリタンの子供たちに許されている遊びは、子供の遊びとは言えないたぐいのものであると仄めかし、ピューリタンたちの子供の教育をも批判しているように思われる。さらに共同体の指導者層に対しての語り口にも批判的なものが見られる。第3章でさらに台に立たされたヘスター・プリンをバルコニーから見下ろす、ペリンガム総督をはじめとする共同体の支配者たちを語り手は次のように評している。

They were, doubtless, good men, just, and sage. But, out of the whole human family it would not have been easy to select the same number of wise and virtuous persons, who should be less capable of sitting in judgment on an erring woman’s heart, and disentangling its mesh of good and evil, than the sages of rigid aspect towards whom Hester Prynne now turned her face. She seemed conscious, indeed, that whatever sympathy she might expect lay in the larger and warmer heart of the multitude;

for, as she lifted her eyes towards the balcony, the unhappy woman grew pale and trembled. (46-47)

その次のパラグラフではジョン・ウィルソン牧師について次のようなコメントがなされる。

He looked like the darkly engraved portraits which we see prefixed to old volumes of sermons; and had no more right than one of those portraits would have, to step forth, as he now did, and meddle with a question of human guilt, passion, and anguish. (47)

すなわち彼らは善良で公正かつ賢明ではあったが、同情心には欠けており、人の善悪の糸のもつれを解きほぐすことにかけては無能で、高位にある牧師でさえも人の罪や苦悩といった問題に介入する権利はない、というのが語り手の見解である。また奢侈禁止令によって一般民衆には贅沢を厳しく禁じておきながら、指導者たち自身は権威の象徴として豪華な衣装を身につけていたことや、「アラディンの宮殿にこそふさわしい」と語り手が言う、ベリンガム総督邸の派手な外観に言及した後、“The impression made by his aspect, so rigid and severe, and frost-bitten with more than autumnal age, was hardly in keeping with the appliances of worldly enjoyment wherewith he had evidently done his utmost to surround himself.” (74-75)と述べ、ベリンガム総督が世俗的な楽しみの数々を身の回りに集めていたことに触れる。その後、語り手は次のようにつづける。

But it is an error to suppose that our grave forefathers—though accustomed to speak and think of human existence as a state merely of trial and warfare, and though unfeignedly prepared to sacrifice goods and life at the behest of duty—made it a matter of conscience to reject such means of comfort, or even luxury, as lay fairly within their grasp. (75)

このようにピューリタン共同体の指導者たちは、一般庶民には質素儉約を厳しく説きながら、自分たちは贅沢を楽しんでいたことを語り手は指摘している。そして最終章では前章での情景について、ディムズデル牧師の胸に緋文字が刻まれているのを否定する人々についての記述が出てくるが、彼らによれば、「ヘスター・プリンがあんなにも長く緋文字を身につけることになった罪と牧師とが、いささかなりとも関係があったなどとは、その死にぎわの言葉で牧師は認めなかったし、ほのめかすことさえなかった」ことが伝えられる。そしてこの解釈に語り手は次のようなコメントを与える。

Without disputing a truth so momentous, we must be allowed to consider this version of Mr. Dimmesdale's story as only an instance of that stubborn fidelity with which a man's friends—and especially a clergyman's—will sometimes uphold his character; when proofs, clear as the mid-day sunshine on the scarlet letter, establish him as false and sin-stained creature of the dust. (175)

つまり牧師の胸の緋文字の存在を否定した人々とは、ディムズデルの友人の牧師たちであり、彼らは友人の人格を持ち上げるためになら、嘘偽りの証言も辞さない人々だと言うのである。

以上のように、ピューリタン社会の冷酷さ、同情心のなさ、支配者層の身勝手さに対して語り手が批判的であることは明らかである。しかしこれは語り手のピューリタンの立場と矛盾するものではない。彼が批判しているのは、ピューリタン共同体のあり方であり、ピューリタンの信仰そのものではない。ピューリタンの指導者たちは「丘の上の町」建設のために政治と宗教がほとんど一体となった共同体を作り上げ、カルヴィニズムに基づいて人間の墮落性を強調した。そして内省を自他共に絶えず強いて、戒律をもって厳しく人々を縛った結果、この共同体は愛の宗教と呼ばれるキリスト教とはかけ離れた、人間性を抑圧する、非人間的な集団となってしまった。¹⁰⁾ 語り手はこのようなピューリタン共同体の非人間性を批判しているのである。

V

カトリック教会の権威による救いの保障を拒否した人々は、救いに選ばれるか永遠の滅びに落ちるかを確かめる基準を神の手にゆだねてしまった。すなわち、ピューリタンにおいては救いの確かさは、神と個人の関係においてしか得られなくなったのである。ピューリタンの契約思想によれば、神の姿に似せて造られた人間は、アダムが神との約束を破った結果、罪に堕ちてしまい、それゆえに人間は神の命じ給う行いを果たす能力を失った存在、すなわち神の裁きの前で滅亡を宣告された存在となったが、憐れみ深い神はこの人間を救うために恩恵を施された。このとき神は恩恵を契約として与えられた。恩恵の契約を与えられた人間は神に対して義務を負うことになり、これが業（わざ）の契約である。罪に堕ちた人間は本来この義務を遂行する能力を失っているにもかかわらず、神は恩恵の契約を与えることによって再び人間が業の契約を果たすことを期待しておられる。救いの確かさが、神と個人の関係においてしか得られないピューリタンたちにとって、契約の絆で人間と神とが結ばれているのだとするこの教説は、大きな支えとなった。彼らは業の契約を果たすために日々励むことによって、救いを確かめることができるからである。彼らが神との約束を守り、日々の仕事に励むとき、人々の救いは保障されるに違いない。¹¹⁾

ただ罪が赦され、救いを得るためには、懺悔が成されなければならない。キリスト教で言う罪とは、何よりもまず、神に対する罪である。ディムズデルは長年にわたり苦行を行ってきたものの、神に対して罪を犯したことを認めていなかったため、苛酷なまでの断食も徹夜の勤行もすべて、懺悔のまねごとにと過ぎず、業の契約を果たすことにはならなかった。最後に公の場で自分の罪を告白することによって、彼は神に対しての罪を認め、悔い改めの証とする。¹²⁾ ヘスター・プリンの場合、彼女は自分の行為を神に対して犯した罪であるとは認識していない

がために、いくら苦行のように日々の仕事に励んでも、恩恵としての救いは与えられない。告白を終えた瀕死のディムズデルにヘスターは言う。“Shall we not spend our immortal life together? Surely, surely, we have ransomed one another, with all this woe!” (173) この言葉はヘスターがまだ自分たちの罪に気づいていないことを示している。ディムズデルはこのようなヘスターを黙らせ、次のように言う。

“The law we broke!—the sin here so awfully revealed!—let these alone be in thy thoughts! I fear! I fear! It may be, that, when we forgot our God,—when we violated our reverence each for the other’s soul,—it was thenceforth vain to hope that we could meet hereafter, in an everlasting and pure reunion. God knows; and He is merciful! He hath proved his mercy, most of all, in my afflictions. . . . Had either of these agonies been wanting, I had been lost for ever! Praised be his name! His will be done! Farewell!” (173)

一度ならず二度までも神のことを忘れたディムズデルであったが、最後には神の恩恵に応じて、ヘスターとの生活より神を選んだのである。このディムズデルの最後の選択に対し、語り手は、“We have thrown all the light we could acquire upon the portent, and would gladly, now that it has done its office, erase its deep print out of our own brain.” (174)と、ディムズデルの胸の緋文字はその役目を果たした、との評価を示している。そしてこの物語の教訓として語り手は次のように言う。“Be true! Be true! Be true! Show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!” (175) ディムズデルの緋文字がその役目を果たし、彼は神に対する罪を公に認め、悔い改めたように、人は罪を抱えた自己の姿を偽ってはならないし、それを公に認めて悔い改めなければならない。すなわち神の道に沿って生きることを語り手はここで教訓としているのである。

ディムズデルの死後、パールとともに一時、姿を消していたヘスターはその後、再びニューイングランドに戻り、自らの意志で緋文字を身につける。パールがヨーロッパで貴族と結婚して幸福に暮らしていることを暗示した後、語り手は、再び緋文字を身につけたヘスターについて次のようにコメントする。

But there was a more real life for Hester Prynne, here, in New England, than in that unknown region where Pearl had found a home. Here had been her sin; here, her sorrow; and here was yet to be her penitence. She had returned, therefore, and resumed,—of her own free will, for not the sternest magistrate of that iron period would have imposed it,—resumed the symbol of which we have related so dark a tale. (177)

「この地に彼女の罪があり、彼女の悲しみがあった。そうなら、彼女のつぐないもまたこの地

になければならない。だからこそ彼女はもどってきた。」という説明には、ヘスターがついに自分の犯した罪を神に対して認め、悔い改めるために戻ってきた、という語り手の見解が現れている。この最終章では語り手はヘスターに対して何の評価の言葉も与えていないが、上の引用からは、やっと神の道に沿って生きることを選んだヘスターに対する無言の賛意が感じられる。

このように『緋文字』の語り手は一貫して、明確なプロテスタントキリスト教徒ピューリタンとしての立場を取りつづけている。一見、ヘスターの自由主義的な生き方を擁護しているように思われる場面でも、語り手の評価に着目すれば、彼はどのような場合でもピューリタンの姿勢を崩してはいないことが分かるのである。

注

- 1) Norman Bryson, "Hawthorne's Illegible Letter," *Nathaniel Hawthorne's The Scarlet Letter*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1986), 81-95.
- 2) David Leverenz, "The Ambivalent Narrator in *The Scarlet Letter*," *The Scarlet Letter*, ed. Seymour Gross et al., 3rd ed. (New York: W. W. Norton & Co., 1988), 416-423.
- 3) 藤川玄人、『共同体とホーソーン』（東京：弓書房、1982年）、109。
- 4) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, ed. By Seymour Gross et al., 3rd ed. (New York: W. W. Norton & Co., 1988), 27-28. 以下、*The Scarlet Letter* のテキストからの引用はすべてこの版を使用し、本文中にページ数を示す。また『緋文字』の日本語訳は、八木敏雄訳『完訳 緋文字』（岩波文庫、1992年）を一部、改変して使用させていただいた。
- 5) 青山義孝、『ホーソーン研究：時間と空間と終末論的想像力』（東京：英宝社、1991年）、36。Charles Swann, *Nathaniel Hawthorne: Tradition and Revolution* (Cambridge: Cambridge UP, 1991), 77他。
- 6) David Stouck, "The Surveyor of 'The Custom-House': A Narrator for *The Scarlet Letter*," *The Scarlet Letter* (New York: W. W. Norton & Co., 1988), 255-265.
- 7) 青山義孝はヘスターの自由思想とは、具体的にはヒューマニズムの思想を指し、ヒューマニズムは神以外のもの、たとえば人間の意志や理性などを拠り所としており、偶像崇拝の一つの顕れと見なすこともできると述べている。青山義孝、『ホーソーン研究：時間と空間と終末論的想像力』、58-59。また山本雅はヘスターの思想に19世紀中葉のアメリカの哲学「進歩思想」を見ている。山本雅、『ホーソーンと社会進歩思想』（東京：篠崎書林、1982年）、223-253。いずれにせよヘスターの思想は、人間中心、人間至上主義の思想であり、キリスト教思想とは相容れないものである。
- 8) トマス・フッカー、「罪の真の姿について」、大下尚一訳、アメリカ古典文庫 15『ピューリタニズム』（東京：研究社、1976）、195-211。

- 9) 『緋文字』における苦行と悔い改めに関しては青山義孝による優れた研究がある。青山義孝、「ホーソンとキリスト教：『緋文字』における苦行と悔い改め」秋山健監修『アメリカの嘆き：米文学史の中のピューリタニズム』（東京：松柏社、1999年）136-156、及び上記の『ホーソン研究：時間と空間と終末論的想像力』第2章「罪と救い——『緋文字』——」を参照のこと。
- 10) 藤川玄人、116。
- 11) 大下尚一、「ピューリタニズムの伝統と変容」、アメリカ古典文庫 15『ピューリタニズム』、17-18。
- 12) Ernest W. Baughman は17世紀のニューイングランドでは罪人の public confession が教会からも裁判所からも要求されており、牧師であるディムズデルが7年もの間、public confession をせず教会の儀式に参加していたことは、植民地と聖書両方の法により、第一級の罪を犯していたことになる、と述べている。Ernest W. Baughman, "Public Confession and *The Scarlet Letter*," *The Scarlet Letter* (New York: W. W. Norton & Co., 1988), 207-212.